

## 日本小児看護学会 第24回学術集会ご案内

学術集会テーマ：とどけよう！小児看護の知と技とこころ—培ってきたものをすべての子どもと仲間に—

【会期】2014年7月20日（日）・21日（月祝）

【会場】タワーホール船堀（東京都江戸川区 都営新宿線船堀駅前）

【演題募集期間】2014年1月7日（火）～2014年2月10日（月）

【参加費用】会員（事前）：10,000円、会員（当日）：12,000円

非会員（事前）：11,000円、非会員（当日）：13,000円

### 【プログラム】

会長講演：日沼 千尋（東京女子医科大学看護学部 教授）

特別講演：志茂田景樹（直木賞作家「よい子に読み聞かせ隊」隊長）

教育講演：大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）

シンポジウム：テーマ「キラッと光る知と技とこころの看護実践」

テーマセッション：理事会企画・委員会企画

会長要望企画（仮）

・慢性疾患をもつ子どもの成人医療への移行支援

・子どものフィジカルアセスメント

・小児看護領域における統合実習 他

【第24回学術集会 URL】<http://www.jschn24.com/>

随時更新いたします。詳細はホームページでご覧下さい。

【事務局】<学術的なお問い合わせ>

東京女子医科大学 看護学部 小児看護学

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1

TEL&FAX：(03) 3357-4874

E-mail : jschn24.bk@tamu.ac.jp

<運営・演題登録のお問い合わせ>

株式会社 ICS コンベンションデザイン

〒101-8449 東京都千代田区猿楽町1-5-18 千代田ビル

TEL: 03-3219-3531 FAX: 03-3219-3577

E-mail: jschn24@ics-inc.co.jp

## 2013年度日本小児看護学会地方会（近畿地区）開催案内

2013年度地方会（近畿地区）を、2014年1月25日（土）に和歌山県立医科大学保健看護学部（和歌山市三葛）において開催いたします。テーマは「もっと子どもたちのための小児看護」とし、教育講演とシンポジウムを予定しています。教育講演では日本クリニクラウン協会の石井裕子氏より「心身の成長に必要な関わりを～子ども自らが一步を踏み出すために～」をテーマにご講演いただき、シンポジウムでは「家庭・外来・病棟における小児看護の連携」について議論を交わしたいと考えております。会長は、和歌山県立医科大学保健看護学部の内海みよ子氏です。詳細につきましては、学会ホームページでお知らせいたします。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

### ～おめでとうございます～

日本小児看護学会第23回学術集会の初日に、日本小児看護学会名誉会員証授与式ならびに日本小児看護学会研究奨励賞授与式が執り行われました。

新たに名誉会員になられた方々

梶山祥子氏、村田恵子氏

### 2012年度日本小児看護学会研究奨励賞受賞論文

2011年発行の日本小児看護学会誌20巻2号と3号、2012年発行の21巻1号に掲載された原著・研究報告論文19編の中から、選考の結果、下記の1編が受賞されました。

薬師神裕子(2011)：思春期I型糖尿病患児へのメンタリングを用いた看護介入プログラムの効果(第1報)—看護介入プログラムの開発と思春期患児への介入効果—. 日本小児看護学会誌. 20(3). 1-9.

### ◆編集後記◆

日本小児看護学会ニュースレター第43号をお届けします。

新理事長のもと、委員会組織も拡大しました。広報委員会では、学会HP (<http://jschn.umin.ac.jp>) と合わせて、会員の皆さまへの情報発信ならびに広く社会に向けた広報活動に、より一層積極的に取り組んでいきたいと考えております。皆さまからのアイデアやご意見、ご要望をお待ちしております。また、会員専用SNSを通して、皆さまとの情報交換・情報共有の場を広げていきたいと考えております。詳しくは、HPをご覧ください。

#### 広報委員会メンバー

委員長：武田淳子

委員：塩飽仁、今野美紀、遠藤芳子、浅利剛史、大池真樹

2013年11月 第43号

# 一般社団法人 日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing



## News Letter

### 日本小児看護学会第23回学術集会を終えて

学術集会会長 中野綾美  
(高知県立大学看護学部)



会長講演

日本小児看護学会第23回学術集会は、平成25年7月13日(土)～14日(日)の2日間、高知市文化プラザかるぽーとで開催されました。今回の学術集会は四国で初めての開催でした。今年は台風が多く、天気予報で台風のニュースが流れるたびに、ドキドキしていましたが、学術集会の朝の青空を見上げて、ホッと胸をなでおろしました。

学術集会のメインテーマは、「子どもと家族の力を支える倫理的判断にもとづく小児看護の創造」としました。子どもの権利条約にわが国が批准して19年が経過し、各分野において総合的な取り組みが推進されている一方で、未だ子どもの生存権や健やかに発達する権利、子どもが意見を表明する権利が擁護されているとは言い難い現状があることから、企画委員会で検討し、「学術集会を通して、様々な健康レベルにある一人ひとりの子どもが、その子どもらしく日々の生活を営み、生きることができますように、子どもと家族の力を支えよう！倫理的判断にもとづく小児看護を創造していこう！」ということになりました。

会長講演では、子どもと家族が互いの意思決定（意向）を織なし、子どもにとってよい決定ができるように、小児看護の専門性を發揮して子どもと家族の力を支えること、そのためには一人ひとりの看護職者の専門性を互いに織なすこと、多職種と組織を超えて織なすことが大切であり、その方法を見出す試みについてお伝えしたいと考えました。特別講演では、玉井真理子先生から「医療の中でいのちと向きあいながら考える—子どもの最善の利益—」というテーマで、病気や障害をもつ子どもの親になることの意味、子どもにとっての最善の利益とは何かについて、ご自身の体験や研究活動等を通して、深く語っていただきました。教育講演では、片田範子先生から「小児看護を創る 子どもが子どもらしく生きることができる社会づくり」というテーマで、看護職者は子ども

もが子どもらしく生きることに関わる社会的な仕事をしていることを自覚し、社会の中で「小児看護」の限界・責任の範囲を示し、子どもが生活する場というパラダイムの中で、新たな小児看護を創り出していくという、私達が取り組むべき新たな課題をお示しいただきました。シンポジウムでは、「子どもがその子らしく生活するためのチームアプローチの創造」というテーマで、4名のノボジストの方々に、「NICUから在宅への移行を支えるチームアプローチ」「学校・医療機関・地域を繋ぎ児童の力を支えるチームアプローチ」「先駆的なチームアプローチを可能にした兵庫県での仕組み作り」「チーム医療を推進する力を育てる 専攻横断型大学院教育の取り組みと看護の役割」について発表していただき、参加者の方々と今後のチームアプローチをどのように発展させていくかについて活発な意見交換がなされました。口演73題、示説93題と、多くの研究成果を発表していただきました。各会場では、参加者の方々から積極的に質問が出され、討議されていました。テーマセッションでは、現在、課題となっている11のテーマについて討議し、互いに刺激を受けることができたと好評でした。ナーシング・サイエンス・カフェでは、看護の道に関心を持つ60名余りの高校生・中学生、保護者の方々が、熱心に参加してくださいました。

運営については、高知と神戸・東京・久留米をテレビ会議システムで結び、企画委員会を開催し、学術集会の準備を進めてきました。学術集会当日は、企画委員の所属する大学・臨床の方々、高知県看護協会および医療機関の皆様、高知県立大学の教員、卒業生・在学生の多くの皆様の多大なご尽力の御蔭で、ホスピタリティ溢れる学術集会となりました。心から感謝申し上げます。

学術集会を終えて、新たな気持ちで歩んでいこう！と思っています。



示説会場

## 日本小児看護学会第23回学術集会に参加して

■ 中村 幸子（広島県立広島病院 小児看護専門看護師）

久しぶりの高知の夏の陽射しや学生時代からお世話になっている先生方や先輩、後輩、友人の顔に懐かしさを感じながら、第23回学術集会に参加させていただきました。『子どもと家族の力を支える倫理的判断に基づく小児看護の創造』というテーマのもと、シンポジウムやテーマセッション、演題では、医療的ケアを必要とする子どもと家族の在宅移行支援や移行後の支援に関するものが多く取り上げられていました。医療技術の発達、社会の動きの中で、医療的ケアを必要とする子どもと家族への在宅移行支援を行なうケースが増えています。当初私は、家族と一緒に家で生活することが『子どもにとってよいこと』と考えていました。しかし、一度は“子どもを家に連れて帰りたい”と強く希望された家族であっても、在宅移行の準備の中で、24時間365日子どもの生命は自分たちにかかるという緊張感の高い生活、同胞への影響、利用できる社会資源の限界など様々な壁にぶつかり、“本当にこ

の子を家で育てることができるのか”と何度も気持ちの揺れを経験されています。学術集会を通して、子どもと家族との対話を繰り返し気持ちの揺れに気づくこと、子どもの状態と家族の状況を継続的にアセスメントし、在宅移行が子どもと家族にもたらす意味、私たちが行なう在宅支援が子どもと家族にもたらす意味を考えること、本当に『子どもと家族にとってよいこと』について多職種チームで考えることの重要性について改めて考えさせていただきました。また、小児医療の縮小や閉鎖などにより厳しくなっている小児医療の中、小児看護に携わっている看護師を対象に取り組み始めた事例検討を中心とした研修会についての発表の機会もいただきました。今後も研修会の評価を行いながら、子どもと家族にとってよいケアを積み重ねていきたいと思います。最後になりましたが、倫理的な視点で子どもと家族の看護について考える機会を与えてくださった皆様に深く感謝いたします。



## 「リレートーク」 蝦名美智子さん

### 自己紹介

樺太生まれ。5ヶ月で函館に引き上げたが、船内で疫病となり、母と私は緊急下船。毎日、大腹部に大量皮下注射を受け、それを揉みほぐすのが母の仕事。疫病で助かったのはお前だけ、と言われた。これが人生における最初の宝くじである。第二次は看護学校受験である。英語がちっともわからなくておまじないで答えた。入学後の英語の時間に「あんなに英語がよくできていたのに、どうしてこれがわからない」と叱られ、あのおまじないは有効だったと知る。ということで、聖路加看護大学2回生に滑り込んだ。「リアル宝くじ」では3000円が最高。

### 看護師になったきっかけ

胃の手術が見たかっただけ。看護学生だった姉が「胃はホチキスで縫う」というので、それを見るために看護学生の道に進んだ。ところが手術室実習（当時は2・3週間）のときに重症な風邪にかかり、胃の手術は見られなかった。10年後、筑波大学附属病院で、夜の緊急手術の外回りを手伝い念願成就。

### 新人時代の思い出

最初の病棟には肺がんの方が多かったが、当時、モルヒネは一日一回しか使えない。まだソセグンもない時代で、ナースコールがあるとお互いに暗い気持ちになり、効かない鎮痛剤を注射しに行くのは新人の仕事であった。その日もFさんに注射をしたのだが、「きさまー！違うだろう」とカッと怒りの眼差しで私の胸ぐらをつかんだ。というか、力が足りず、その手は空をつかんでバタッと布団の上に落ちた。ショックで「婦長さん、辞めます」と言った。が、三日間考へ「私が辞めたら皆がますます忙しくなるだけ。Fさんの痛みが減るわけではない」と結論づけ、「婦長さん、辞めるのやめます」と撤回した。

### 小児看護の魅力

子どもはウソをつかない、素直、知恵比べがたまらなくたのしい、でしょうか。小児病棟で出会った守君5歳は、毎週一回の採血があった。が、その様子は、医師と看護師総勢4人に馬乗り等で抑制され、彼はつばを吐きかけて抵抗する、であった。翌週



故高橋シュン先生（右から2番目）とともに（左から2番目が筆者）

「守君、明日、つばはやめて。お兄ちゃんでしょ。みっともない」と言うと、つばは吐かなかつた。2週目、「また明日騒ぐの。みっともない」というと、手足の力を抜いて抵抗しなかつたという。経過を聞くと「これやったら退院できるよ」と言うと素直に採血させるので、毎回退院できるよって言うようになって・・・」と

のこと。守君に「ウソ言ってごめんね」と謝った。彼は無言。3週目、「明日、採血だよ」と伝えたところ、翌朝、守君は出勤する看護師の顔ぶれをみて「宮内さん、僕の採血して」と一番上手な看護師に声をかけた。小児看護を考える時、彼がおしえてくれたあれこれがベースになっている。

### ストレス解消法

美味しいものを食べることと、我が家家の草取り。

### 後輩たちに期待すること

子どもの医療処置に親の付き添いが当たり前となること、子どもの「待って」に応え「やる気」になるように関わり、馬乗りやタオル巻きをしない看護師が増えて欲しい。参考までに平成21年に我々がおこなった調査では、3~5歳の子どもに対して「子どもがやる気になるまで待つ必要がある」という医師は40.2%であるが実際に待った医師は17.7%、同様に看護師は72.8%が待つ必要があると答え、実際に待ったのは28.5%であった。77.7%の看護師は馬乗りやタオルで巻く固定を行うと答えた。

### バトンを受けて欲しい人 中野綾美さん

## 新理事長挨拶

二宮 啓子（神戸市看護大学）

が多いため、「診療報酬検討委員会」と「小児看護政策委員会」に分けました。また、次年度まで続く『健やか親子21』の推進事業は小児看護政策委員会の事業に組み込みました。



本学会は2013年4月1日付で一般社団法人日本小児看護学会となり、2013年7月より新たな役員のもと理事会がスタート致しました。2015年の社員総会・会員集会時までの2年間の任期となります。どうぞよろしくお願ひ致します。

法人化に伴い、社員総会（評議員会）が決議機関となり、事業の一部組み換え、予算編成や収支決算に関する手続きは変わりましたが、「小児看護に関する実践、教育及び研究の発展と向上に努め、それらを通して子どもの健康増進に寄与すること」を目的とした学術団体であることは変わりません。

子ども・家族を取り巻く保健・医療環境、社会情勢の変化に迅速に対応しながら活動を進めていきます。小児医療においては、医療の高度化・複雑化、入院期間の短縮化が子どもへの安心・安全な看護の提供を困難にしています。一方、医療の中心が病院から在宅に急速にシフトする中で、子どもと家族の在宅移行とその後の生活安定への支援体制の整備が急務になっています。このような状況に対応するためには、チーム医療はもちろん、教育や福祉等の関係者を含めた多職種連携が必須となります。

今期の活動としては、これまでの事業を継続・発展させるために委員会の充実を図り、ホームページを通して会員への情報提供と共に委員会活動の成果等を社会に発信すること、そして法人化後の効率的な学会運営の基盤作りを行いたいと思います。

委員会活動の充実については、評議員会・会員集会でいただいた意見や2012年度に会員に実施したアンケート調査結果を踏まえて組織改正を行い、常設委員会を9委員会に増やしました。小児看護政策検討委員会は、診療報酬も含めて行っていましたが、2年ごとの改訂作業や評価で役割

さらに、委員会活動を充実させるためには、効率的な学会運営が求められます。効率的な運営方法を模索していくことも今期の課題と考えています。

会員の皆様のさらなるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

### 理事会メンバー

総務委員会	二宮 啓子 日沼 千尋 樺木野裕美 内 正子
編集委員会	奈良間美保 診療報酬検討委員会 日沼 千尋 小児看護政策委員会 江本 リナ
国際交流委員会	中村由美子 学術・研究推進委員会 飯村 直子
広報委員会	武田 淳子 広報委員会 中野 綾美
倫理委員会	勝田 仁美 倫理委員会 中村 廉子
災害対策委員会	平林 優子 災害対策委員会 草場ヒフミ
教育委員会	監事 日沼 千尋 監事 樺木野裕美

### 一般社団法人日本小児看護学会組織図

